

# 地域通貨から補完通貨へ ～欧州での新しい取り組み～ 2

廣田裕之（立命館アジア太平洋大学）

mig@olccjp.net

<http://www.olccjp.net/>

前はイタリアの事例について紹介しましたが、今回はドイツにある補完通貨の事例について紹介したいと思います。また、「エンデの遺言」でも登場され、出版や講演活動を通じて補完通貨の普及に積極的に動いているマルグリット・ケネディさんのお話も紹介します。

### 3) キームガウアー(ドイツ・バイエルン州)

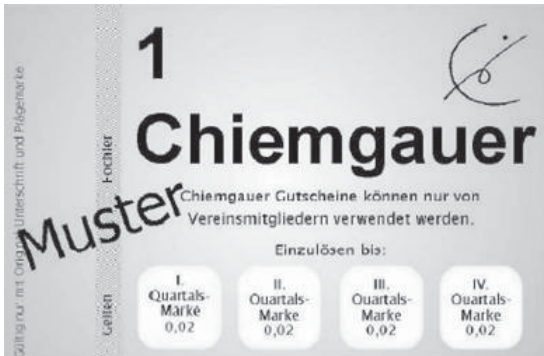
<http://www.chiemgauer.info/>(ドイツ語、一部英語)

次に紹介するのは、女子高生が中心となって立ち上げたキームガウアーという面白い地域通貨の事例です。これは後ほど紹介するREGIOの一環として、ミュンヘンから東に80キロほど行ったところにある観光地プリーン・アム・キームゼー(Prien am Chiemsee)町を中心に、2003年1月より動いているプロジェクトです。REGIOとしては他にもブレーメン市のローラントやベルリン市のベルリーナーなどがあるのですが、女子高生が運営しているというもの珍しさや地域内で活発に使われているという実態もあって、現在欧州の中でも一番注目されている事例です。



写真1: 7月に開催された欧州補完通貨会議で発表する女子高生たち<sup>1</sup>

このキームガウアーは、プリーンにある高校で社会の先生をしているクリスティアン・ゲレーリさんが、授業中に地域通貨の話をしたところから始まりました。この話に女子高生たちが関心を持ち、課外活動の一環としてキームガウアーという補完通貨を立ち上げました。この写真で紹介している女子高生の中には現在では大学受験準備の関係で引退している人もいますが、下級生が事業を引き継いでいます。このキームガウアーでは1キームガウアー=1ユーロというレートで1, 2, 5, 10, 20キームガウアーが発行されています。また、裏面には学校の生徒が描いたイラストが載せられています。



画像 1:1 キームガウアー紙幣 (見本)

このキームガウアーは、以下のことを目的としています。

- 1 .雇用の創出：事務作業を生徒が行い、それに見合った対価を得る
- 2 .文化・教育・環境保護活動の推進：キームガウアーというシステムが、それらの活動を行うNPOを資金的に支援
- 3 持続可能性の推進：有機食品や再生可能なエネルギーの利用など
- 4 連帯の強化：地元の消費者と事業者との人間関係の強化
- 5 地域経済の推進：キームガウアーによって購買力がユーロよりも地域に残りやすくなり、地場企業に有利に働く。また、減価する貨幣のシステムによって取引も推進

この中でも、特に2番はキームガウアー独自の面白い仕組みだといえます。具体的に説明すると、まずキームガウアーに参加している会員は、自分が支援するNPOの事務局でユーロをキームガウアーに両替します。そしてこのキームガウアーを使って、参加商店の商品を買います。参加商店は受け取ったキームガウアーで地元の商店や農家

などへの支払いもできますし、ユーロに再交換することもできますが、この際に5%の手数料が取られます。この手数料のうち2%がキームガウアー事務局の事務費に充てられ、残りの3%がNPOの運営資金となるのです。このシステムがどのようなメリットをもたらすのかについて、それぞれの立場で見てみましょう。

**NPO:** キームガウアー事務局からキームガウアー紙幣を仕入れて(103キームガウアーを100ユーロで)、一般会員に103ユーロで売るため、差額の3ユーロを自分たちの活動資金にすることができます。

**消費者:** 自分が支援したいと思っているNPOでユーロをキームガウアーに交換して、そのキームガウアーを使って地元商店で買い物をします。ですので、実質上自分の財布を痛めることなく、自分が応援したいと思っているNPO(環境保護関係、文化関係など)を、資金的に直接支援することができます。

**地場企業:** 消費者からのキームガウアーを額面通りに受け取り、これで別の地場企業から仕入れをしたり、5%の手数料を払ってユーロに交換します。ユーロに交換した場合、手元に残る金額は減ることになりますが、地元NPOへの寄付を間接的に支援することで、地域密着型の商店として消費者を引きつけることとなります。

視察後にクリスティアン・ゲレーリさんにメールで伺ったところ、2004年10月現在で500名の個人会員と200社の企業会員が参加しており、2万4000キームガウアーが流通しているということです。また、ゲレー

りさんの資産によるとこのキームガウアーはユーロに再交換されるまでに平均で2.5回取引が行われていますが、ユーロの場合は平均1.7回でお金が地域外に流出していることを考えると、キームガウアーの利用によってそれだけ地域内での取引が増えていることがわかります。

#### 4) ケネディさんの講演

<http://www.margritkennedy.de/>

今回は残念ながら WIR 銀行でお話を伺うことはできませんでしたが、ドイツのエコビレッジ・レーベンスガーデンを訪れて、マルグリット・ケネディさんにお話を伺うことができました。

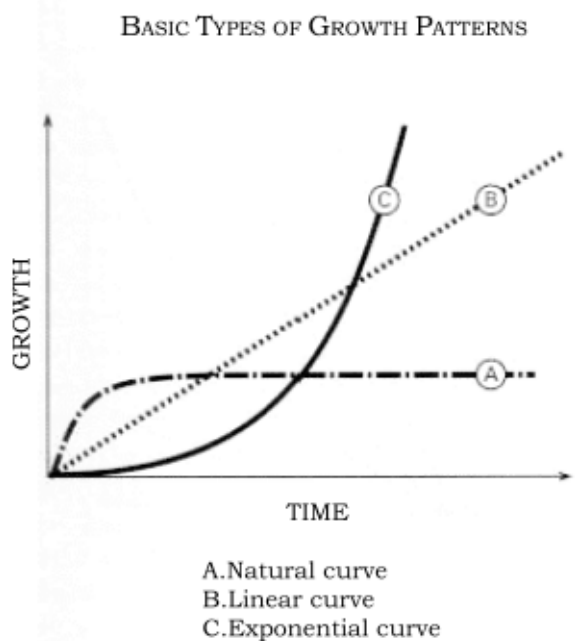


写真2: レーベンスガーデンで話をするケネディさん

もともと建築家だったケネディさんは、80年代に環境に配慮した建築を推進してゆこうとしましたが、資金面で割に合わないということでいつも計画が挫折していました。持続可能な社会作りの障害に今の金融システムがなっているという問題にぶつ

かった彼女は独学で経済を勉強し始め、「金利ともインフレとも無縁な貨幣<sup>2</sup>」を発表しました。この本は英語やフランス語、ドイツ語やスペイン語、ポーランド語など数多くの言語に訳されていますが、現在の通貨制度の根本的な問題を取り扱っています。それについて、以下図を使ってご紹介しましょう。

#### 1. 成長曲線と自然界の関係



ここでは3つの成長曲線が紹介されていますが、自然界での成長は基本的にA型に推移してゆきます。人間でいえば、赤ちゃんのうちや思春期は急激に成長しますが、大人になると量的な成長は終わり、質的な成長に移行します。これは経済でも同じことで、日本経済で言えば戦後直後の貧しい時期は生活の改善にとまって経済が成長しまし

たが、一家に一台どころか一人が一台クルマを持つ時代になるとこれ以上消費しようとしなくなります。ですので、本来であれば経済もA型の成長曲線をたどる必要があるわけです。

しかし、自然界にはC型のように、最初は緩やかなものの、ある時点から加速度的な成長をするモノがあります。これは、他ならぬガン細胞です。ガン細胞の成長はやがて歯止めが利かなくなり、人体を全て食い尽くしてしまいましたが、複利という利息システムのために指数関数的な経済成長を要求する現在の経済システムは、その構造上地球の資源を食い尽くしたり、競争の名の下にリストラや賃金カットなどを進めたりします。

## 2.借金をしていない人も間接的に金利負担

次に、金利の問題はお金を借りている個人や企業だけの問題ではなく、社会全体にかかってくる問題だということをケネディさんは示しています。たとえば1983年の西ドイツ(当時)・アーヘン市のゴミ収集の経費の12%が利息の支払いに充てられていますが、これが西ドイツ北部の上水道(1981年)であれば38%が、そして住宅(西ドイツ平均、1979年)に至っては77%が利払いに充てられています。もちろんこれは利用料金として間接的に市民や借家人などが負担することになるため、実は金利は誰もが払っていることになるわけです。

## 3.金利システムにより、貧しい人から金持ちへの富の移転が

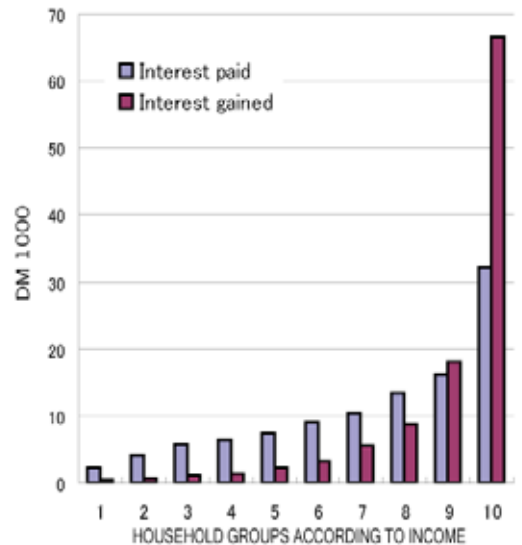
### COMPARISON OF INTEREST PAID & GAINED

In ten groups of households of 2.5 million each

Applied Interest paid or gained = DM270 Billion(1982)

(= interest transfer from private to private funds)

Applied credit interest = 5.5%



Interest paid	2.3	4.1	5.9	6.5	7.5	9.1	10.5	13.5	16.3	32.3
Interest gained	0.5	0.7	1.1	1.5	2.3	3.2	5.5	8.8	18.0	66.5
Balance	-1.8	-3.4	-4.8	-5.0	-5.2	-5.9	-5.0	-4.7	+1.7	+34.2

All values in thousands of Deutsche Marks per household per annum.

現在の通貨制度の一番の問題は、貧しい人からお金持ちへの所得の移転が進むということです。上の図は収入の規模に応じて貧しい家庭から豊かな家庭までを10段階に並べたもので、灰色が2で示した間接的な負担を含めた各家庭の金利負担を、黒は金利収入を示していますが、これを見るとほとんどの家庭が現在の金利システムで損をしている一方、一握りの家庭が莫大な金利収入を手に入れていることがお分かりになるでしょう。

このような問題を提示されたあと、ケネディさんは現在のところ、これらの金利の問題と関係ない補完通貨の実践を育てることが大切だというお話をされていました。理論的には現在の通貨システムは続かないことは立証されているし、過去の歴史がそれを裏付けているので、むしろ持続可能な通貨システムを提起して、その有用性や実現性を証明することで、理論を社会的に受け入れてもらいたいということなのです。補完通貨としては、LETSや交換リングなどの事例がすでにたくさんありますが、それらは非常に狭い地域(たとえば大きな都市圏の一地区)を対象としており、なかなか企業間取引に使えるようなものには育っていません。ですので、先ほど紹介したキームガウアーのように、それよりももうちょっと広い日常生活圏を流通対象とした補完通貨を推進してゆくことで、地域経済の潤滑道具として補完通貨が受け入れられるようにしようというわけです。実際、REGIOネットワーク(<http://www.regionetzwerk.de/>)の基盤を作ったのはこのケネディさんですし、7月の会議で紹介されたドイツ国外の事例にはそのようなものもたくさんあります。そのあたりについて、次回は書いてゆくことにしましょう。

(続く)

(注)

- <sup>1</sup> 本来であれば視察中の写真を使うべきなのですが、残念ながら視察時には運営スタッフである高校生が夏休みで留守だったので、7月の会議のときの写真で代用しています。
- <sup>2</sup> なお、英語訳はインターネット上で公開されています。<http://userpage.fu-berlin.de/~roehrigw/kennedy/english/>